

2 三島市の特徴的な地域信仰にみる歴史的風致

はじめに

三島市には、地域住民の誇りとなっている特徴的な地域信仰が存在する。その代表として市北部の伊豆佐野地区の「やっさ餅」や「吉田さん」、三嶋大社周辺及び市南域平野部における河川流域を主体とした「天王信仰」が挙げられる。

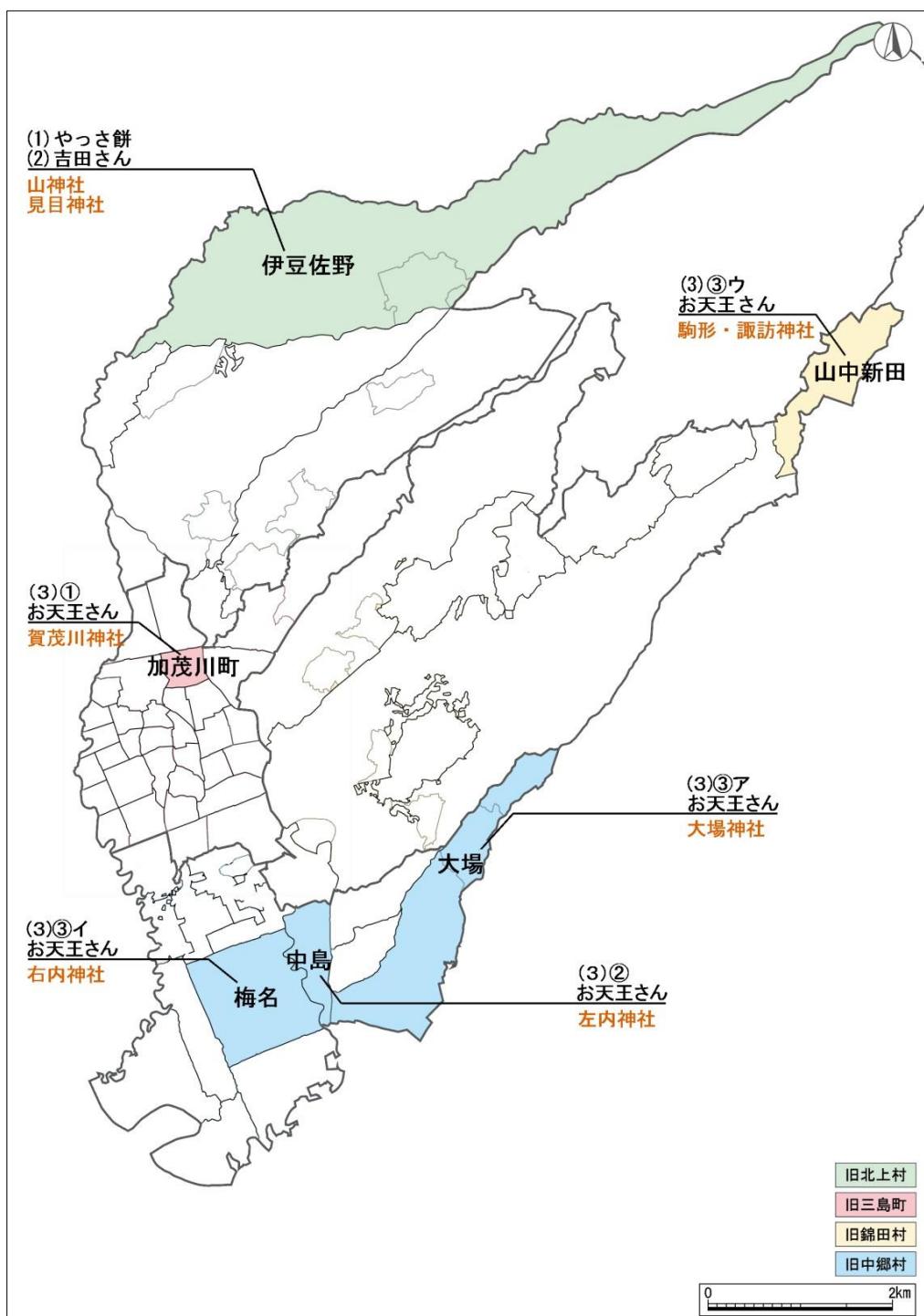


図 三島市の特徴的な地域信仰が行われる地区（活動と建造物）

(1) 旧北上村(伊豆佐野地区)の山神社信仰「やっさ餅」を構成する建造物と活動

「やっさ餅」は、三島市北部の伊豆佐野地区において山の神を祀る山神社の祭礼で行われる神事である。山の神は大山祇命（おおやまづみのみこと）または木花咲耶姫命（このはなのさくやひめのみこと）とされており、本来は山で仕事をする農村や山村の人たちを守護する神である。日本における山の神の性質は極めて多様であるが、関東地方から中部地方にかけては特に荒ぶる神としての特徴が顕著である。

三島市伊豆佐野の「やっさ餅」も同様に、山の神を荒ぶる恐ろしい神として捉えてきた人々の信仰が窺える。この「やっさ餅」は、かつては1月16日夜と17日に行われていたが、現在では1月16日に近い土曜日の夜と翌日に行われている。

かつては山の神を祀る祠と地所が個人所有であり、後に村に1銭5厘で売却したことや、もともとは年2回行っていた祭礼を1回に改めたという昭和28年（1953）の記録が残されており、それ以前から催行されてきた祭りであることが窺える（『郷土資料館だよりNo.3』「伊豆佐野の山の神祭り」昭和57年（1982）発行）。

伊豆佐野地区では最寄（もより）と呼ばれる共同体が、大きく3つの地域に分かれて活動を行っている。それぞれを「上最寄、中最寄、下最寄」と呼び、このうち「やっさ餅」を行うのは中最寄である。現在、中最寄は中村組14戸・田中組5戸・藍の沢組26戸の全45戸で構成されている。祭礼は組内全戸の輪番制で、当番となる家は当家（宿）と呼ばれ、45年に1度、当番がまわってくる。

祭礼の準備は前日の午後から始められ、深夜になると餅つきが行われる。若い衆6～10名ほどがつき手となり、持ち寄った5合ずつのもち米で2臼つく。この時、「ヤッサ、ヤッサ」と掛け声を発しながらサルスベリの木で作った長さ6尺ほどの豎杵で、臼の周りを回りながらつくの



写真 山神社

| 山神社 | |
|------|---|
| 鎮座地 | 佐野117番地 |
| 社殿 | 本殿流造、雨覆兼拝殿流造 |
| 境内坪数 | 42坪 |
| 級 | 13級社 |
| 祭神 | 大山祇神 |
| 由緒 | 明治43年(1910)に個人所有であった祠を山神社へ遷座し、村の氏神として祀る旨の木札が残されている。 |

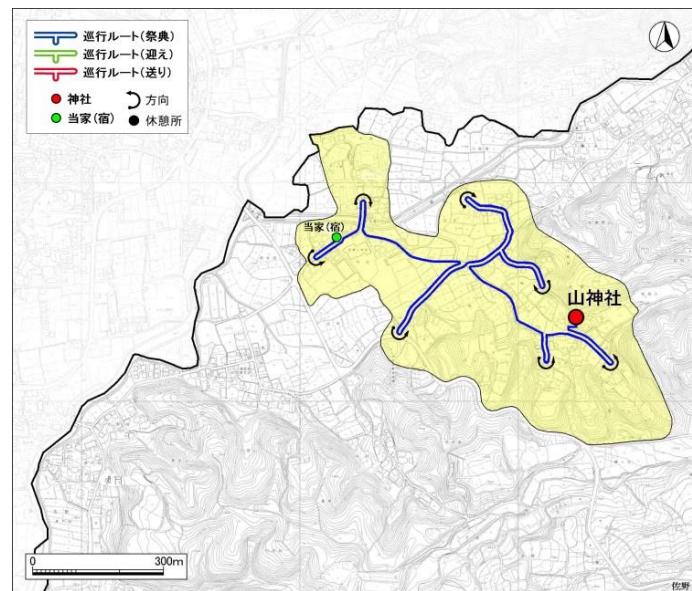


図 やっさ餅巡回ルート(1/20,000)

が習わしである。餅がつきあがると一斉に豊杵で餅を高々と差し上げ氣勢をあげる。この餅は丸く整形し、伊豆佐野地区を巡回して山の神の神前に運ばれる。巡回は、神前で餅を切り分けるための鎌を持つ人を先頭に、当家・男衆が続き、「ヤッサノサア」と大声を掛け合って運ぶ。巡回は1時間ほどかけて中最寄全住戸を隈なくまわり、最後は社の神前で餅を集落全戸に当たる45等分に鎌で切り分ける。この餅は奉納した後にそれぞれの家へ配布され、祭礼は終了する。

かつては、巡回の際に豊杵に餅をつけたまま行き、その豊杵をわざと民家の軒先に擦りつけたり、餅の入った臼自体を横倒しにして転がして民家にぶつけながら移動し、泥だらけになった餅を神前に運ぶ荒々しさであった。これは「暴れるほど山の神が喜ぶ」と言わされたためであり、また、一方では荒ぶる神である山の神自身が、若い衆に憑依し暴れ回ったとも考えられている。戦時中は米が不足し、「やっさ餅」を行わない年があったが、その年は中最寄の家で伝染病が流行った。「神様がお腹立ちだ」ということで、次の年からは再び行うことになったが、これもまた山の神の荒魂をあらわす逸話といえるだろう。

現在はこうした面は陰をひそめているが、大きな掛け声が深夜の集落に響き渡り、山間にこだまする。この掛け声には、山から得られる恵みに感謝すると同時に、今年も多くの収穫物が得られるようにという祈りが込められている。「やっさ餅」は伊豆佐野地区の中最も寄だけで行われる特徴的な祭礼で、餅つきから行列の巡回までの行事は地域固有の景観である。その根底には、山の神信仰に対するこの地域独自のあり方が窺え、祖先から受け継いできた良好な環境が形成されている。



写真 つきあげ



写真 餅を山神社へ



写真 奉納

（2）旧北上村（伊豆佐野地区）の厄除け信仰「吉田さん」を構成する建造物と活動

京都吉田神社は節分祭で有名である。節分といえば、豆を撒いて鬼を払うものを連想するが、吉田神社の節分祭は一般には疫神祭、追儺祭（ついなさい）として知られている。追儺（または鬼やらい）とは古く中国の秦代の頃から伝わる行事で、方相氏と称する呪師が熊の皮を被り、黄金の四ッ目の面を被って黒衣を着し、戈と盾を手に疫神を追い払うというものである。もともとは各季節の終わりに天子が「儺」を行うものであったといい、儺は難と同じで「つつしむ」という意味を持ち、このことから駆疫（疫を駆せやる）という意味になった。

三島市の伊豆佐野地区で行われている厄除け信仰の「吉田さん」は、寛政年間（1789～1801）に疫病が流行った際に、京都の吉田神社から祭神の分霊を迎えたことに始まると伝えられている。最も古い記録は文政13年（1830）の『十ヵ村吉田宮祭礼当番継札』で、当時伊豆佐野村は戸数101軒、名主は直右衛門という人であったと記されている。

活動の拠点となる見目神社は、伊豆佐野の氏神で、天正18年（1590）までは当境内の山上にあり、寛永10年（1633）に遷座したことが、棟札から窺うことができる。

祭礼は3月最終日曜日と翌週土曜日である。この祭りの特徴的なことは、一地域の神社として奉るものではなく、複数の地区で神輿を介在して信仰を共有することにある。つまり、1年ごとにそれぞれの地区にある社にこの神の御靈代を迎える、各地区をまわってゆくのである。現在は12地区により行われているが、合同で行うところもあるため、10の当番地区に分かれている。すなわち、①神山・岩波、②石脇、③佐野、④茶畠、⑤伊豆佐野、⑥麦塚、⑦二ツ屋、⑧平松、⑨公文名・稻荷、⑩久根であり、その範囲は現在の行政単位をまたいで広範に渡っている。三島市は伊豆佐野地区のみが該当しており、他地区と同様に10年に1度「吉田さん」の神輿を迎える。



写真 見目神社（合社さん）

見目神社

| | |
|------|---|
| 鎮座地 | 佐野1番地 |
| 社殿 | 本殿流造、拝殿入母屋造 |
| 境内坪数 | 406.5坪 |
| 級 | 12級社 |
| 祭神 | 見目大神、事代主神后 六柱 |
| 由緒 | 山上に鎮座していたところ、天正18年(1590)豊臣秀吉による小田原攻めの兵火に遭い社殿を焼失した。寛永10年(1633)に現在地に遷された。 |

伊豆佐野地区では字梨坂に所在する見目神社の境内に「吉田さん」を迎える。以下、伊豆佐野地区における事例を記述する。3月最終日曜日、前年の当番地区である茶畠の若い男衆16～20名が法被や白装束で2基の神輿を担いで各戸を巡行した後、茶畠と伊豆佐野の村境の境川橋上で、神輿を受け渡す「お渡り」が行われる。古くは「神輿を渡せ、渡さない」と激しく奪い合うのが通例であったが、現在では茶畠の担ぎ手とともに見目神社まで一緒に巡行する。当番地区では、「奉納吉田神社」の幟を立てて迎え、見目神社の境内は紅白幕で覆う。境内においてお練りをした後、前年度当番地区との間で引継ぎ式が行われる。そして、神輿は「合社さん」と呼ばれる建物に奉安され、1週間のお休みをとる。

祭りの本日（ほんび）は、翌週4月第1土曜日である。10年に1度の祭礼は集落をあげて行われ、幟旗を掲げる者を先頭に賽銭箱を担ぐ者、太鼓を叩く者、神輿・担ぎ手と続き、控えの担ぎ手と参加者を含む行列は100mを越え、大変賑やかなものとなる。担ぎ手は神輿を激しく揺する習慣があり、神輿は右に左に大きく傾けられ暴れ神輿となる。この時「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」という掛け声が、太鼓の音に合わせて何度も繰り返されて響き渡り、沿道では地区の人たちにより行列参加者に飲食物などを振る舞うおもてなしに行われる。巡行は5時間ほどをかけて伊豆佐野地区全戸をまわると終了となる。祭礼後、神輿は祭典用具とともに合社さんに奉安され、次の年まで1年間集落の厄除けの守り神となる。

「吉田さん」の祭礼は、伊豆佐野地区と隣接する裾野市や御殿場市との交流圏の中で形成され発展してきた。疫病などの禍ごとは連續的・地域的に広がることが多く、根源を同じくする災厄を排除するためには祈願も共に行うことが有効と考えられたため、この祭礼の特徴の一つである広域的なまとまりを形成するに至った。

10年に1度という祭礼は、地域の結束力を高めるものとしての意義を持ち、現在まで連綿と続けられてきた。しばらく振りに訪れた祭礼が集落の大きな喜びとなり、祭りの賑わいを一層高めている様子を現在でも見ることができる。「吉田さん」の舞台は氏神である神社境内と集落全域に及ぶため、祭礼の伝統を守ることはコミュニティの安全と結束を固めることに大きく関与しており、地域固有の良好な環境を形成している。

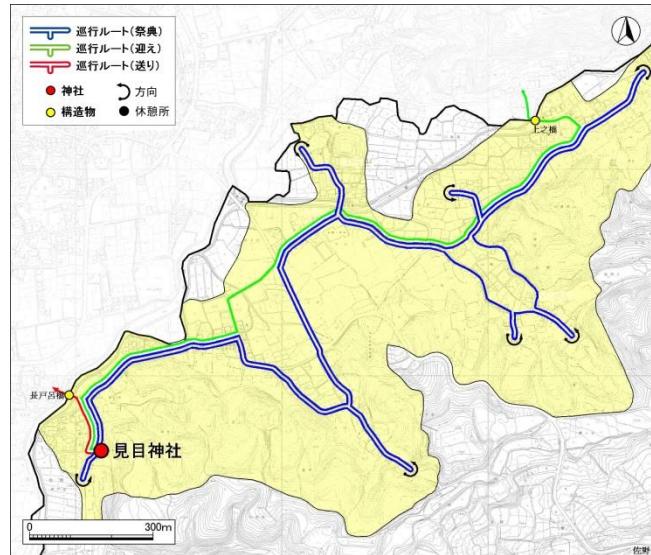


図 「吉田さん」神輿巡回ルート(1/20,000)



写真 「吉田さん」お渡り



写真 道祖神前を通過



写真 見目神社に到着



写真 合社さんに奉安



写真 翌日 神輿の巡行



写真 合社さんに奉安



写真 合社さんで1年間の奉安

(3) 旧三島町・錦田村・中郷村の地域信仰「神輿巡行（八坂大神）」と「祠神輿（お天王さん）」

牛頭天王（ごずてんのう）及び須佐之男命（すさのおのみこと）に対する信仰を「天王信仰」と呼ぶ。この信仰は祇園社や天王社を拠り所として全国的に広がりをみせており、三島市の「八坂大神」と「お天王さん」もこの信仰に属している。

日本では奈良時代以降、日本古来の神への信仰と仏教信仰とが融合した「神仏習合」の思想が広がっていた。もともとインドで祇園精舎の守護神とされた牛頭天王もまた日本においては須佐之男命と習合して信仰されるようになったのである。牛頭天王は本来疫病を流行らせることのできる神とされ、須佐男之命も「蘇民将来」の伝承にあるように疫病を操ることのできる神性を有しているために結びつけられた。そのため天王信仰の祭礼の多くは、疫病流行期である夏に行われる。

天王信仰の祭礼は京都八坂神社の祇園祭、愛知津島神社の尾張津島天王祭が代表的なものであるが、両者はそれぞれ特徴を異にする。八坂神社の祇園祭は怨靈となった貴人の魂、いわゆる「御靈」を鎮める御靈会から生じ、後に山鉾に代表されるように庶民の華やかな祭礼となった。山鉾巡行は本来神輿の来訪を歓迎する行事であり、祭りの中心はあくまで神輿であった。一方、尾張津島天王祭は主に水に関わる祭りで、ダンジリ船による勇壮なものとなっている。

三島市にみられる天王信仰の祭礼においてもまた、両系統の流れをくむ祭礼が行われている。大別すると、通常の神輿で巡行するかたちのものと、祠を神輿として巡行させるものの2種である。旧三島町の加茂川町、旧錦田村（にしきだむら）の竹倉・山中新田（やまなかしんでん）の3地区が前者であり、旧中郷村（なかごとむら）河川流域の中島・御門（みかど）・多呂（たろ）・大場（だいば）・梅名・安久（やすひさ）・御園（みその）の7地区が後者となる。いずれも日本各地の天王信仰の祭礼と同様に夏季、7月に行われる。

三島市には、上記のように天王信仰の祭礼において2種のあり方がみられるが、両者は土地によって、祭礼の目的の意味合いが異なるようである。すなわち、三嶋大社の鬼門方向にあたる加茂川町や、かつての三島宿の北東境にある山中新田及び東境の竹倉における天王信仰の祭礼の主眼は、「他地域から侵入してくる悪疫の退散」を願うものと考えられる。一方、御門・多呂・大場・安久（大場川水系）、中島（大場川・御殿川（ごてんがわ）水系）、梅名（御殿川水系）、御園（大場川・狩野川水系）の平野部河川流域では、「水害とそれに起因する疫病退散」を主な目的とする祭礼となっている。

以下、加茂川町の賀茂川神社の祭礼に代表される「神輿巡行（八坂大神）」と中島地区の左内神社の祭礼に代表される「祠神輿（お天王さん）」について記述する。

① 旧三島町（加茂川町）の「神輿巡行（八坂大神）」を構成する建造物と活動

ア 建造物



写真 賀茂川神社

賀茂川神社

| | |
|------|---|
| 鎮座地 | 加茂川町17番21号 |
| 社殿 | 本殿神明造、拝殿入母屋造 |
| 境内坪数 | 503坪 |
| 級 | 9級社 |
| 祭神 | 須佐之男命 |
| 由緒 | 古くは八坂神社と称し三嶋大社の摂社であった。棟札は正徳元年(1711)11月15日、他6枚が残る。大正4年(1915)12月に宮町鎮座十柱神社と合併し、賀茂川神社と社号を改めた。昭和19年(1944)3月8日に村社に昇格し、神饌幣帛料供進指定神社となり、昭和21年(1946)神祇院廃止後宗教法人として今日に及ぶ。 |

イ 活動

加茂川町に所在する賀茂川神社は、天王信仰の根幹となる須佐之男命を祀る神社であり、ここで行われる「八坂大神神輿渡御（やさかのおおかみしんよとぎょ）」もまた、天王信仰のもとに生じた「お天王さん」と関係性を持つものである。

賀茂川神社は、もとは八坂神社と称し、三嶋大社の摂社の一つとして大社及び三島宿の鬼門を守護する存在であった。大正4年（1915）に宮町（現加茂川町）に鎮座していた十柱神社を合併して賀茂川神社と改称し、現在に至っている。

この社の祭神である八坂大神は、毎年7月8日に三嶋大社にお出ましになり、同月15日に三島市内をめぐる厄除けの神で、幕末の頃から行われている。現在、毎年7月15日に町内安全、疫病鎮護を祈願して神輿が三島市内を練り歩き、「八坂大神神輿渡御」と呼ばれる。

この神輿渡御は、かつての八坂神社である賀茂川神社から八坂大神をお迎えする神事で、前述のとおり賀茂川神社は三嶋大社の摂社であるため、三嶋大社神官を主体として行われる。7月8日、祭りに先立ち三嶋大社から賀茂川神社へ大神をお迎えに行く神事が行われる。大社から小さな神輿が出されると、賀茂川神社に着くと、ご神体をその神輿に遷す遷御祭が執り行われる。この後、御幣で道を祓い清めながら小さな神輿は再び大社への道をたどり、大社に到着すると舞殿で奉安祭を行い、ご神体を漆塗りの大きな神輿へ遷し1週間奉

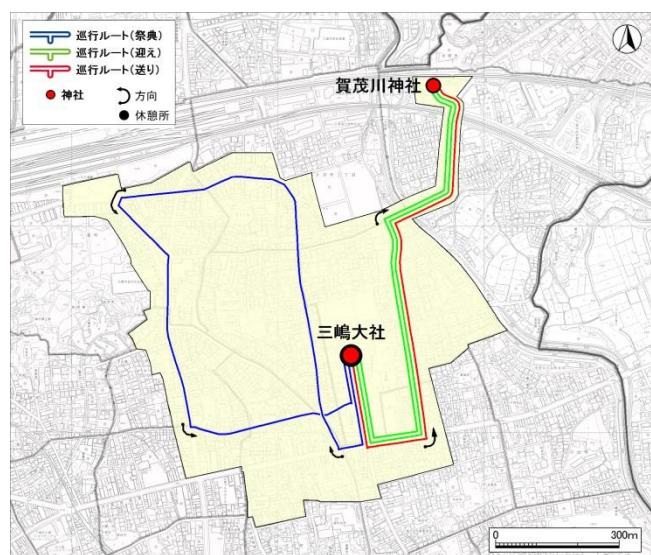


図 賀茂川神社の「八坂大神 神輿渡御」ルート(1/20,000)

安する。

7月15日の午前10時、八坂大神渡御祭が執り行われる。渡御祭の神事後、幟・太鼓・大麻・御幣・お守り・神輿の順に行列が組まれ、20～30名の担ぎ手により神輿は鳥居をくぐり出発する。「ホイッサ ホイ」の掛け声と共に市街地へ繰り出し、大きな交差点に差し掛かると、担ぎ手は神輿を激しく練りまわして気勢を上げる。渡御中は絶えず太鼓が一定のリズムをとり、雅楽が流れ、休み処まで続けられる。

三島駅南口広場などで市内巡幸祈願祭の神事が行われ、神輿は大社町・大宮町・一番町・芝本町（しばほんちょう）・本町・中央町の順に巡行して三嶋大社に戻る。舞殿に着くと還幸祭の神事が行われ、木遣り・三本締めをする。午後2時に還御祭が行われ、神輿は賀茂川神社へ向かう。到着するともう一度還御祭が行われ、ご神体は賀茂川神社に帰着し、祭礼は終了となる。



写真 賀茂川神社の神輿

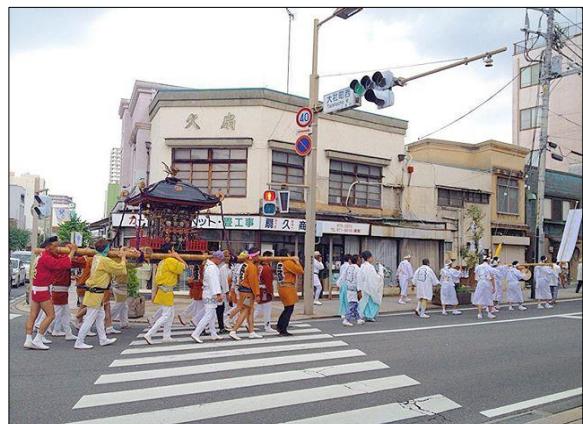


写真 賀茂川神社の神輿渡御祭

② 旧中郷村（中島地区）の「祠神輿（お天王さん）」を構成する建造物と活動 ア 建造物



写真 左内神社

左内神社

| | |
|------|---|
| 鎮座地 | 中島字西310番地の2 |
| 社殿 | 本殿流造、拝殿入母屋造 |
| 境内坪数 | 596坪 |
| 級 | 11級社 |
| 祭神 | 阿米都瀬氣多知命 (或云豊磐窓命) |
| 境内社 | 山神社 飛地境内社:八坂神社 |
| 由緒 | 同地区鎮座の右内神社とともに、三嶋大社左右御門の守護神として下田街道を挟んで左右対称して鎮座。明治6年(1873)に村社に列す。旧社地は君沢郡中島村園田であったが、明治19年(1886)2月の火災により現在地に遷った。明治40年(1907)6月21日神饌幣帛料供進指定神社に指定を受けた。正徳5年(1715)改築の棟札が残るが、現在の社は昭和16年(1941)改築のものである。 |



写真 (飛地境内社) 八坂神社

イ 活動

中島地区が位置する三島市南部の中郷地域は水田地帯であり、大場川、御殿川、狩野川の水の恩恵を受けた生業を行ってきた。しかし、氾濫時における川の恐怖とも常に隣あわせだったため、人々は水に対する崇敬の念と同時に恐怖の念をも抱いていた。従って「お天王さん」のあり方は、中郷地域の人々のこうした観念を映し出すものとも捉えられる。

中郷地域で行われる「お天王さん」は、極めて特徴的な祭礼が執り行われている。それは、①祭礼のクライマックスが水中の祭りであること、②はだか祭りであること、③神社に旗を立てないこと、④祠自体を担ぎ、本来的には神輿でないこと、⑤縄を巻いて祠を保護すること、⑥祠巡行の後、お涼み台（お仮屋）に祠が奉安されること、の6点である。これらの特徴は、天王信仰の原初的神社である八坂神社、津島神社の祭礼には認められず、三島独自のものといえる。

中島地区の「お天王さん」で使用する祠は、この左内神社の飛び地境内社である八坂神社に奉安されており、祭礼の日はこの八坂神社から出発する。八坂神社の棟札には「祇園牛頭天王、素戔鳴尊・文化八年（1811）六月六日」とあり、この地区の「お天王さん」の原初を探る手掛かりとなっている。その他として、『天王講連名覚書』が残されており、

慶応2年（1866）と記された『覚書』には当番者名やそれにかかる費用、購入品が書かれている。

現在、中島地区の祠神輿は、細い縄を帯状に見えるように縦・横に巻いたもので、すっきりとした印象を受ける。この祠神輿づくりは同地区の「伝統芸能保存会」が中心となり、八坂神社で行われ、同時に子ども祠神輿もつくられる。

中島地区の「お天王さん」は、かつては7月6日を祭礼本日としたが、現在は担ぎ手が一番参加し

易い7月第1土曜日に行われている。当日朝、八坂神社に奉安されていた祠は、同神社で神輿に縛り付ける作業が行われ、巡行の終着点となる左内神社では、鳥居左手に祠神輿を涼ませるための「お涼み台」を設ける。祭礼では、まず午後1時30分に子ども祠神輿が出発する。両神社と下田街道を主体に巡行し、橋には近づかず、途中3ヶ所で休憩して2時間ほど練り歩き、八坂神社に戻る。続いて夕方6時30分、大人たちによる祠神輿が八坂神社を出発する。担ぎ手は心身が清らかである証しとして、裸でフンドシに鉢巻き姿が正装となる。巡行ルートは御殿川梅名橋・大場川大場橋・御殿川中島橋・御殿川八反畠橋（ごてんがわはったばたばし）・大場川古川橋の順に太鼓を鳴らしながら移動し、沿道の人たちからは盛んに水をかけられる。

巡行途中には休憩所（オタビショ）を設け、地域各戸を巡り、交差点や橋では祠神輿をまわし、揺さぶって荒々しく担がれる。この時、沿道では麦殻や稻藁を焚いて祠神輿を赤々と照らし、担ぎ手の冷えた体を温める。終着地点である左内神社に到着すると、縄で縛った祠を木片で神輿から切り解き、事前に設置しておいた「お涼み台」に濡れた祠を乗せて奉安する。津島天王祭の影響を受けた祭りを行う地域では、一定期間「お仮屋」と呼ばれる仮設の祠に神を祀ることが多く、三島の中郷地域で見られるこのお涼み台も、その流れをくむものである。左内神社近くのお籠もり小屋（公民館）では、女衆による天王講が行われ、天王経が唱えられる。9日間に亘る天王講が終わると祠は八坂神社に戻り、中島地区の「お天王さん」は終了する。

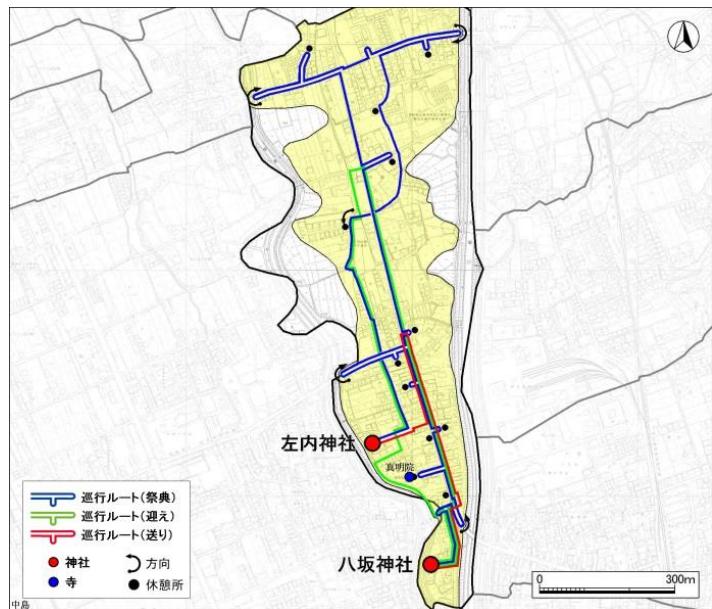


図 中島地区 祠神輿巡行ルート(1/20,000)



写真 中島地区の祠神輿



写真 中島地区の子ども祠神輿の練り



写真 中島地区の祠神輿の練り



写真 お涼み台

③その他「お天王さん」を行う地区における建造物と活動

ア 旧中郷村（大場地区）の大場神社

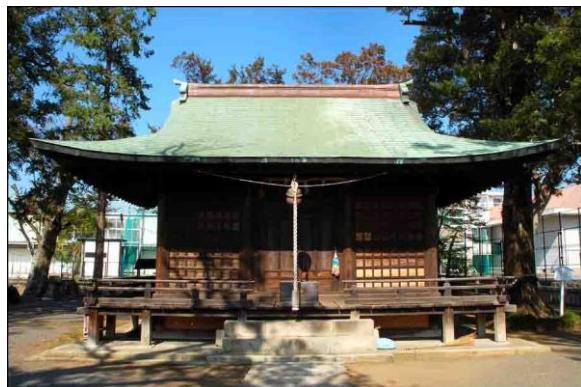


写真 大場神社



写真 大場神社の境内にある八坂神社

大場地区の「祠神輿（お天王さん）」は、祠を荒縄で結って祠神輿とし、半裸の男性がその祠神輿を担いでまわるという中郷地域（特に中島・大場・梅名・安久）で見られる荒々しい「お天王さん」の一つの好例である。

昭和30年代までは、神輿の巡回ルート上の大場橋に差し掛かった際は、神輿が投げ落とされ、担ぎ手達も次々飛び込んで、川の中で神輿が練られたものであるが、現在は川に投げ落とさずに橋上を練り歩いている。

中郷地域で行われる「お天王さん」の特徴として、上記のように荒縄で祠を縛るというものがあるが、それぞれの地区でその縛り方は異なっている。大場の神輿の縛り

大場神社

| | |
|------|--|
| 鎮座地 | 大場10番 |
| 社殿 | 本殿神明造、拝殿入母屋造 |
| 境内坪数 | 433.1坪 |
| 級 | 9級社 |
| 祭神 | 日本武尊、誉田別尊（應神天皇） |
| 境内社 | 八坂神社、山神社、床浦神社、阿夫利神社、（飛地境内神社：珍鶴稻荷神社） |
| 由緒 | この地が沢の郷と言われた頃からの鎮座で、当初は御嶽權現と称えられ崇敬を集めたという。社宝記録類も蔵していたが、天正18年（1590）豊臣秀吉の小田原攻めの兵火に遭い由緒を知ることはできない。建造物としては、安永7年（1778）の棟札を有し、元の村社。大正13年（1924）拝殿と鳥居を改築して今日に至る。 |

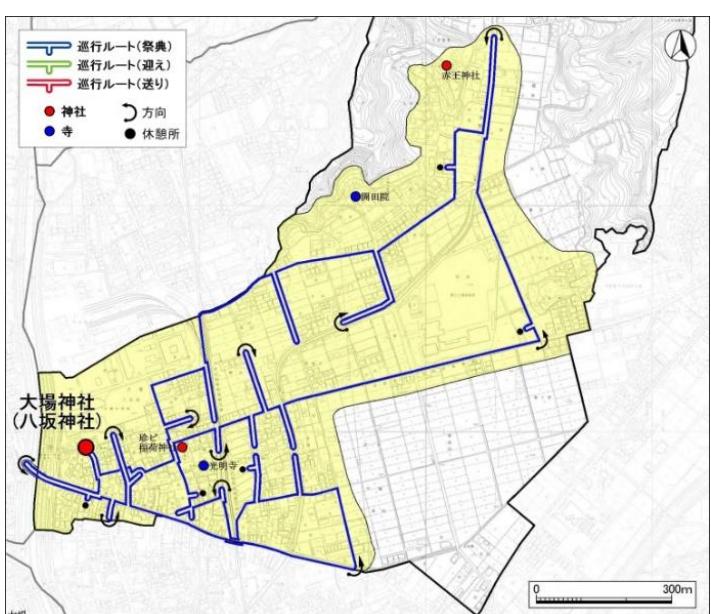


図 大場地区 祠神輿巡回ルート (1/20,000)

方は7本の縄をねじって太くし、祠全体にからげたもので勇壮な姿となる。



写真 大場地区の祠神輿の練り



写真 大場地区の祠神輿



写真 大場地区の祠神輿の練り



写真 大場地区の祠神輿と函南町間宮地区の祠神輿の競り合い

イ 旧中郷村（梅名地区）の右内神社



写真 右内神社

梅名地区の「祠神輿（お天王さん）」は、右内神社を起点として集落を巡回する。

大場地区と同様、昭和30年代までは、神輿の巡回ルート上の梅名橋に差し掛かった際は、神輿が投げ落とされ、担ぎ手達も次々飛び込んで、川の中で神輿が練られたものであるが、現在は川に投げ落とさずに橋上を練り歩いている。

梅名の神輿は2本の縄をひねったものを使って縛られ、縦横8列に網かけをし、頭頂部には飾りが付けられる。祠神輿づくりは右内神社で行われ、同時に子ども祠神輿もつくれる。この子ども祠神輿の形は、本式のものをひと回り小さくしたもので、祭礼の日には町内をまわる。

また、右内神社境内にある天王社は、祠神輿のお涼み台としても利用される。

右内神社

| | |
|------|---|
| 鎮座地 | 梅名1番地 |
| 社殿 | 本殿流造、拝殿入母屋造 |
| 境内坪数 | 686坪 |
| 級 | 11級社 |
| 祭神 | 櫛石窓命 |
| 由緒 | 同地区鎮座の左内神社とともに、三嶋大社左右御門の守護神として下田街道を挟んで左右対して鎮座。慶長9年(1604)6月修建の棟札を有している。文禄慶長度の古文書3通が保存されている。明治6年(1873)9月に村社となり、昭和8年(1933)10月12日神饌幣帛料供進指定神社に指定を受けた。境内には、名木千数百年の樹齢を保つ、大バラの木がある。 |



写真 お涼み台としても利用される天王社

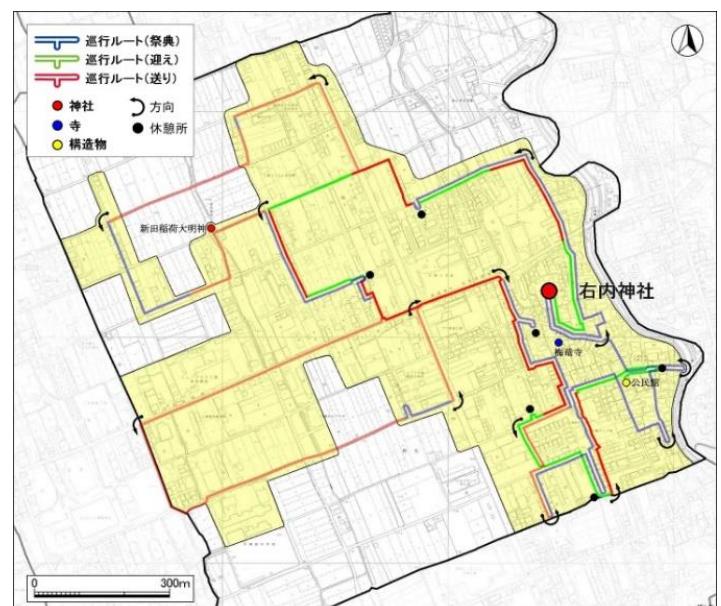


図 梅名地区 祠御輿巡回ルート (1/20,000)



写真 梅名地区の祠神輿（右）・子ども祠神輿



写真 梅名地区の子ども祠神輿の練り



写真 梅名地区の祠神輿の練り

ウ 旧錦田村（山中新田地区）の駒形・諏訪神社

山中新田の「神輿巡行（お天王さん）」は、地区的氏神である駒形・諏訪神社の境内社八坂神社の祭礼である。駒形・諏訪神社の創建は慶長6年（1601）の五街道の敷設とほぼ同時期で、この山中新田に宿場に準ずる「間の宿」が成立した慶長～元和年間（1596～1624）のことと考えられている。境内は史跡山中城跡本丸に当たり、天然記念物の大檜と矢立の杉がある。

7月の祭礼では、ここを起点に神輿が出発し、集落の一軒一軒をまわっていく。

この山中新田で行われる八坂神社のお天王さんは、昭和2年（1927）田方郡錦田村自治会発行の『我等の郷土』にも記録が見られ、集落成立時から現在も続いている行事である。



写真 駒形・諏訪神社

駒形・諏訪神社

| | |
|------|--|
| 鎮座地 | 山中新田40番地の1 |
| 社殿 | 本殿流造、拝殿兼雨覆春日造 |
| 境内坪数 | 372.8坪 |
| 級 | 14級社 |
| 祭神 | 建御名方命、日本武命 |
| 境内社 | 八坂神社 |
| 宝物 | 徳大寺大納言社号軸物江戸期祭礼帳 |
| 由緒 | 境内は、史跡山中城跡本丸にあたる。諏訪神社を奉ずる元山中の人と、駒形神社を奉ずる箱根の人たちにより開かれたと考えられている。境内には天然記念物の大檜と、矢立の杉がある。 |



図 山中新田地区 神輿巡行ルート (1/20,000)

写真 山中新田地区の神輿の練り

おわりに

三島市の地域信仰である「やっさ餅」、「吉田さん」、「天王信仰」は、祭礼の形態が荒々しく行われることが共通しており、特徴でもある。また、「天王信仰」では周辺の集落でも同じような祭りは行われているが、その活動範囲は町内単位に限定されている。

上記3祭礼は、収穫物の減少に対する恐怖心、流行病などへの集団感染に対する恐怖心、洪水にともなう広域被害に対する恐怖心といった怖れから逃れたいという切実な思いが主となり、生じたものである。現代と比べ気象や医学に対する知識が乏しかった時代においては、人々にはその発生原因や解決策が分からなかった。そこで、神にすがり鎮めもらうことが最優先の策と考え、これらのような祭礼が行われるようになったのである。「やっさ餅」、「吉田さん」、「天王信仰」の信仰は、地域の氏神と人々が固く結びついた信仰であり、集落内環境の安全確保のために実施されるようになった。

江戸時代には上記の祭礼ばかりではなく、各集落においては他にもいろいろな信仰・風習・講などの活動があった。地域祭礼にも栄枯盛衰があり、現在、廃れてしまった祭礼もあれば、今なお継承されているものもある。昔と比べ、今は凶作や疫病、自然災害が発生すること自体が少なくなり、また、発生した場合でも生活に対する影響は減少しており、祭礼の目的自体が変容しているものもある。

こうした中で、上記3祭礼においてもまた、祭礼の担い手が少なくなってきたという現状はあるものの、これらの地域では今なお地域の誇りや人々の繋がりを維持しており、何よりも、そこに住む人々の営みを後世に残したいという住民の気持ちが地域の神社と一体となって、三島市固有の歴史的風致を形成している。

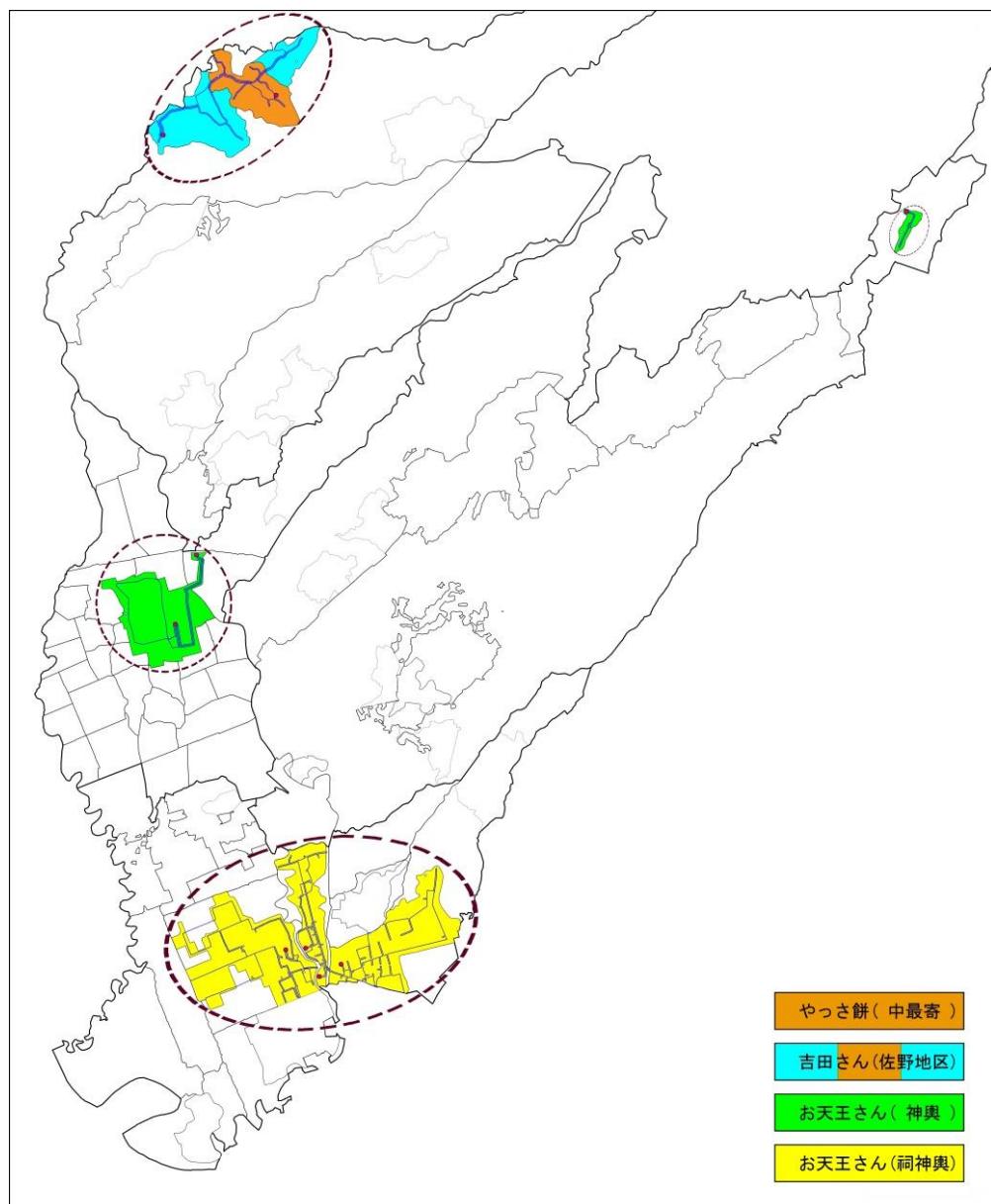


図 「やっさ餅」「吉田さん」「お天王さん」信仰にみる歴史的風致の範囲(1/120,000)

《コラム》「お天王さん」にみるその他の地域信仰

歴史的風致に位置付けた「お天王さん」の他にも、市内には次の地区で「お天王さん」が行われている。

ここでは、それらの地区で行われている「お天王さん」について述べる。

ア) 竹倉地区の八王子神社

旧錦田村の竹倉で行われる「神輿巡行」の神輿は八王子神社から出発する。

八王子神社は、竹倉と隣接する夏梅木（なつめぎ）両地区の氏神で、八王子大神他1柱を祀り、もとは八王子権現と称した。元和年間（1615～1624）玉澤妙法華寺の住職日亮が、八王子山通猛院を建立し、その守護神としたといい伝えられ、明治時代に神社となり、八王子神社と改称した。現在の本殿は昭和5年（1930）の北伊豆震災後に改築したものである。

天正7年（1579）の『武士家文書』という記録には「三滝八王子権現」と記されており、明治以降に八王子神社と改称し、現在に至る。この神社から繰り出した神輿は集落内を練り歩き、「あばれ神輿」として知られている。



写真 八王子神社



写真 竹倉地区のあばれ神輿

イ) 御門地区の井之森稻荷神社と帝釈堂

御門地区の氏神は『延喜式』神名帳にも記載されている古社、剣刀石床別命（つるぎたちいわとこわけのみこと）神社であるが、祭礼日に「お天王さん」の祠を据えて祀るのは、集落の東に位置する井之森稻荷神社である。井之森稻荷神社は、古墳と推定される塚の上に建ち、初午には幟が並び立つにぎやかな姿が見られる。7月の「お天王さん」では、この神社から集落の北の入口に建つ帝釈堂まで祠神輿は巡行する。



写真 井之森稻荷神社



写真 帝釈堂

ウ) 多呂地区の神明神社

多呂地区の神明神社の祭神は大日靈尊（おおひるめのみこと）他6柱である。大日靈尊は太陽の女神、つまり天照大神（あまたらすおおみかみ）のことともされる。天王信仰で祀られる須佐之男命ではないが、所在地に「祇園山（ぎおんさん）」という天王信仰と関係する地名が存在している。神明神社を出発した「お天王さん」の祠神輿は台車に乗せられ、子どもたちによって集落内を引かれてゆく。



写真 神明神社

エ) 御園地区の神明宮

伝承によれば、御園地区のあたりは伊勢神宮領であったともいわれ、御園という地名もそれに因るものであるという。「お天王さん」の祠は、神明宮内に祀られている。御園地区の「お天王さん」は、神明宮を出発し、集落内を巡行して再び神明宮に戻ってくる。



写真 神明宮

オ) 安久地区の王子神社・安富神社

安久地区の「祠神輿（お天王さん）」は、王子神社から出発し、安富神社を経て集落内を巡行する。安久地区では明治の初め頃、祭りが一時中断したが、周辺地域が「お天王さん」を行い続けていることを受け、復活を熱望する氏子たちは昭和57年（1982）に保存会を発足し、祭りを復活させている。



写真 王子神社



写真 安富神社



写真 安久地区の祠神輿

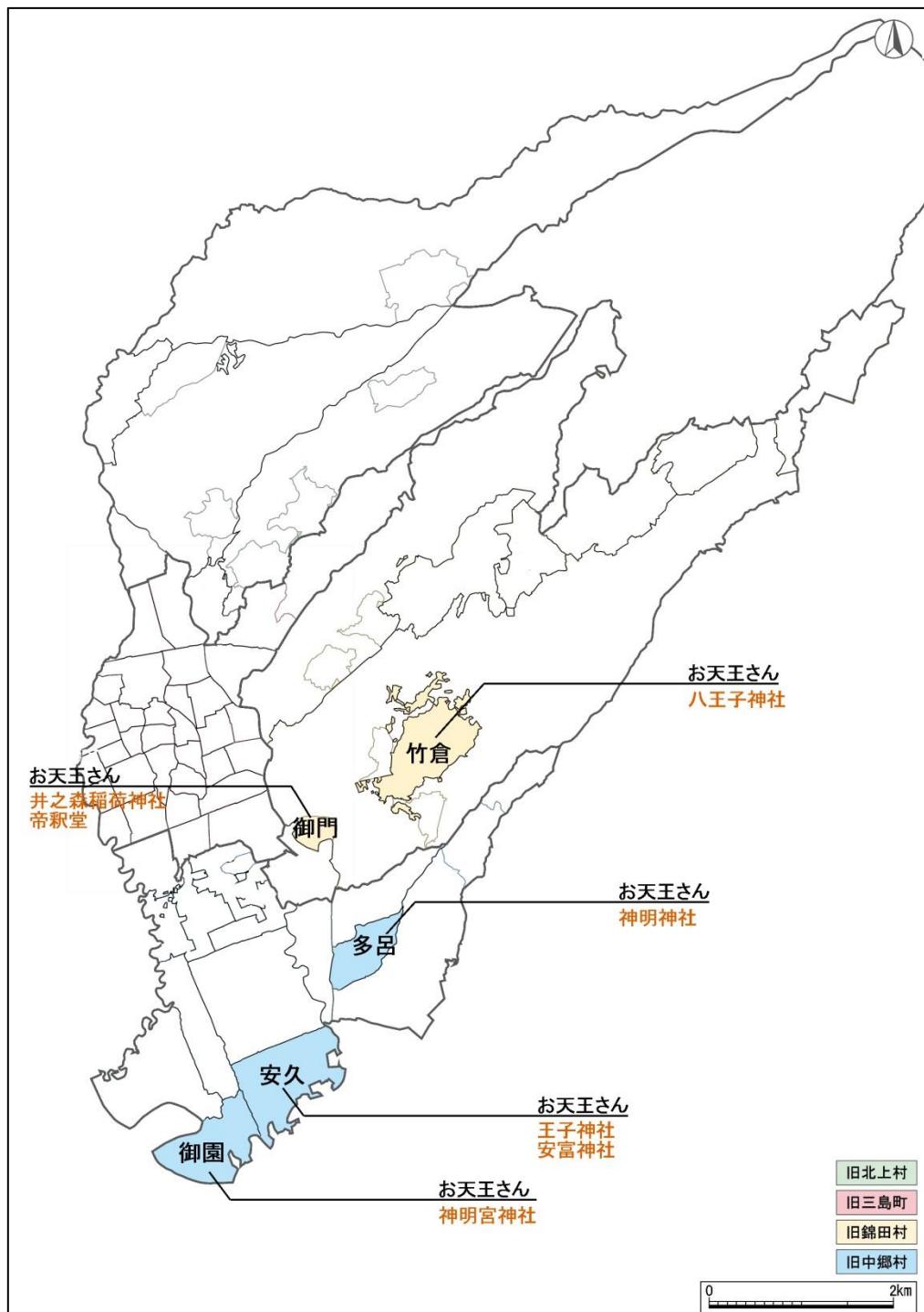


図 「お天王さん」にみるその他の地域信仰